

ポピュラー音楽研究における 分野と方法について

—RILM にみる研究動向の推移—

大倉恭輔

Keywords : POPULAR MUSIC, CONTENT ANALYSIS, DOCUMENT TYPE,
CLASSIFICATION, RILM, 1967-1981

1 ポピュラー音楽研究の必要性

メディアの発達とともに、われわれの生活のさまざまな部分において、音楽がしめる割合は増大し続けてきた。そして、その場合の音楽とは、一般に「ポピュラー音楽」と称されるものであることはいうまでもない。もちろん、「ポピュラー」という名前の音楽ジャンルがあるわけではないし、「ポピュラー様式」という独自の音楽形式があるわけでもない。むしろ、西欧のクラシック音楽ではないもので、気軽に聞ける音楽の総称あるいはイメージとして、ポピュラー音楽は理解され受容されているというのが実際であろう。

では、そもそも、ポピュラー音楽とはどのような音楽のことをさすのであろうか？ 中村は、ポピュラー音楽とは「大衆文化としてのその本質から、大衆社会の成立とともに生まれ、市場経済とマス・メディアのなかで商品として生産され流通する音楽」であり、「その感性は20世紀の都市の庶民生活に依拠し、作り手は職業音楽家であるが聴衆（消費者）と同一の社会意識の中にいるのが原則」（石川 et al, 1991）であるような音楽であるとしている。

ここにみられる「メディアとの関連・商品性・都市大衆文化」といったキーワードは、他の多くの文献においても指摘される点である（北川, 1980）。しかし、ポピュラー音楽が今世紀の発明品ではないことも事実である。たとえば、19世紀ロンドンにおける「ミュージックホール」の隆盛やオルゴールという「メディア」を通じての楽曲の流通などは、当時の庶民の生活において、商品としての音楽の消費がすでに行われていたことをしめすものといえよう。

だが、今日的な意味でのポピュラー音楽が、どのような本質を有し、どのような音楽的・社会的な背景の中から成立してきたのかを解きあかすことは、それほど簡単な作業ではない。それは、必然的に、なに故に、人間は音楽を必要としたのか、生活環境や社会的な位置づけによって消費する音楽が異ならざるを得なくなったのかという問いにたどりつくことになるからである。

その意味で、ポピュラー音楽研究とは、今日の大衆社会・メディア社会を解説するための素材であると同時に、われわれが作りあげてきた文化や社会制度の本質をときあかす上でも、欠くべからざる領域であるといえよう。

2 ポピュラー音楽研究における問題点

では、実際問題として、ポピュラー音楽に関する研究は、どのように行われてきたのであろうか。上述の例からもわかるように、ポピュラー音楽の概念を広くとれば、20世紀以前の庶民の音楽や音楽生活について、音楽学・音楽史を中心に、かなり早い段階から研究がなされてきたことが諸文献からわかる。また、今日的な意味でのポピュラー音楽についても、いわゆるマスコミ研究が開始されると同時に、メディア論的な視点にもとづく論文が発表されてきた。

しかしながら、それらは個々には興味深い論考ではあるものの、散発的なものであり、ひとつの研究領域として確立されていたとは言いがたいものがあつた。言うまでもなく、「ポピュラー音楽学」というものは存在しない。「コミュニケーション研究」がそうであるように、ポピュラー音楽もまた、音楽学・社会学・教育学などの関連領域の研究者が、それぞれの領域からの興味と方法論によって、ポピュラー音楽を対象として分析するという形式になっている。

だが、ここで問題なのは、ポピュラー音楽に焦点をあてたアカデミックな研究体制の整備の遅れである（注1）。コミュニケーション研究においては、さまざまな領域の研究者が集まりながらも、常に「コミュニケーション・コミュニケーション研究とはどのようなものであるのか」が問われ、その成果が着実に積み重ねられてきた。これに対し、ポピュラー音楽研究の領域においては、そうした研究の成果・蓄積が、ポピュラー音楽というものに対しての求心性を

もって行われてはこなかったように思われる。

その例として、ポピュラー音楽研究においては、スタンダードとなるような概論書が少ないことがあげられる。ポピュラー音楽を理解する上で重要な研究書はいくつもあるが、これから学術的な研究を始めようとするものにとって、有用なものはほとんどないといってよい。

近年になって、完成度の高い概論書とリーディングスが出版されたが、それらの目次をみても、Middletonのものは、理論研究に関する方法論については詳細だが、調査研究についての章はなく (Middleton, 1990), Frithらのものは、記号論やセクシュアリティといった問題に1章ずつをあてるなど意欲的ではあるが、Jonston & Katzの論文が落とされているなど、所収論文の選択に一部不満が残る (Frith & Goodwin, 1990)。

そして、このような構成に、基本的・標準的な方法論・原論が確立しないまま、高度かつ最新の分析方法を取り込んできた、これまでのポピュラー音楽研究のあり方を見いだすことができよう。

また、上述の問題と関連して、研究のための基礎的な資料・統計データが少ないことも指摘されよう。一般に、音楽の社会史的な研究ではデモグラフィックなデータが使用されることも多く、ポピュラー音楽研究においてもディスコグラフィ (注2) などの資料は充実している。

しかしながら、たとえば、コミュニケーション論的なアプローチで研究を行おうとするとき、コミュニケーションの過程を構成する各部分に関しての具体的・実証的資料の数の少なさに気づかざるを得ない (Lull, 1989)。また、ポピュラー音楽の特質である商品性に注目するとき、そこでは産業構造・消費生活の実態との関連が問われなければならないが、企業側のマーケティング資料はあるものの、学術的な観点からなされた研究は多くない (Negus, 1992)。

いずれにせよ、ポピュラー音楽研究における方法論の確立をめざす上で、なすべきことは多いが、そのひとつの方向として、これまでのポピュラー音楽研究の動向に関する内容分析を行うことがあげられよう。ある学問領域が発展するためには、その領域において、どのようなことがいかに研究されてきたのかを知ることが、どうしても必要となる (山本, 1992)。そして、ポピュラー音

楽研究においても、その実態を知ることによって、それを研究することの意味と今後の指針を得ることができるのではないだろうか。

このような観点から、今回、RILM abstract を使用して、同誌に収録された文献の内容分析を行ったところ、いくつかの知見が得られたので、ここに報告したい。

3 分析の方法

a 目的

前項で述べたような問題意識にもとづき、ポピュラー音楽研究における方法論確立のための手がかりとするべく、これまでに発表されたポピュラー音楽に関連する諸文献の内容分析を行い、その研究動向を明らかにすること。

b 仮説

本研究は、記述的・探索的に行われるが、その際、以下の点に着目しつつ、作業を行うものとする。

- 1) ポピュラー音楽研究は、ポピュラー音楽およびポピュラーカルチャーに対する社会的認知度の高まりにともない、年代を追うごとに、その発表件数が増加するだろう。
- 2) ポピュラー音楽研究は、音楽表現上の taste・流行の変化にともない、その主要対象ジャンルが、ジャズからロックへ移行するだろう。

c RILM abstract とその使用について

RILM (Repertoire International de Literature Musicale) は、1966年、ニューヨーク市立大学のスタッフを中心に設立・運営されている国際的な音楽文献要旨目録であり、音楽に関する論文・著作などであれば、関連領域の学術誌に収録されているものも含め、可能な限りの文献を収集することを目的としている。同誌は、年4回発行され、そのうちの3回が abstract 編、1回が INDEX 編である。さらに、5年ごとに CUMULATIVE INDEX を作成しており、音楽全般に関する研究動向が把握できる資料として広く使用されている。

いうまでもなく、こうした abstract は完全なものではなく、そこから得られ

る情報にのみ頼ることは危険性がある（宮司，1993）。そのため，宮司は，研究動向の分析においては，abstractではなく，国際学会での発表動向を使用することを提案している。しかしながら，ポピュラー音楽研究の場合，研究者数や発表件数の問題もあり，そうした方法をとることはかえってデータにバイアスを生じさせることになる。よって，今回は，RILMに準拠して調査を進めることとした（注3）。

なお，同誌は，発行が遅延しており，本稿作成時点では，1986年度分が最新刊となっている（CUMULATIVE INDEXは1981年まで）。そのため，今回の分析も，1967年から1981年までの15年間のデータに限定せざるを得なかった。ただ，注2に記したように，1981年が国際ポピュラー音楽学会設立の年であることを考えると，今回の分析は，国際的な研究体制の整備にいたる前史的なデータとしての意味があると思われる。同時に，この期間は，ロックの定着と拡散が開始される時期にもあたるため（注4），ロック時代のポピュラー音楽研究の実態が明確になるという利点があると考えられる。

d RILMの分類と集計の手続き

RILMの各項目は，タイトル・著者名・掲載誌名などの通常のデータに加え，以下のような分類項目によって，INDEXでの表記がなされている（表1）。

- 1 RILM 所収年
- 2 整理番号（所収年度ごとの通し番号）
- 3 文献の形態（TYPE）・5タイプ29項目
ARTICLES, BOOKS, COMMENTARIES, DESSERTATIONS, REVIEWS
- 4 文献の分野（CLASSIFICATION）・9分野93項目
REFERENCE AND RESEARCH MATERIALS, HISTORICAL MUSICOLOGY, ETHNOMUSICOLOGY SOUND SOURCES, PERFORMANCE PRACTICE AND NOTATION, THEORY, ANALYSIS AND COMPOSITION, PEDAGOGY, MUSIC AND OTHER ARTS, MUSIC AND RELATED DISCIPLINES, MUSIC IN LITURGY AND RITUAL

表 1 a RILM 分野 (CLASSIFICATION) 分類

Reference and Research Materials	Performance Practice and Notation
01 Bibliography and librarianship	50 Performance practice, general
02 Libraries, museums, collections	51 Performance practice to ca.1600
03 Encyclopedias and dictionaries	52 Performance practice, ca.1600-1825
04 Catalogues and indexes	53 Performance practice, ca.1800-1900
05 Catalogues, thematic	54 Performance practice, 20th-century
06 Bibliographies, general	55 Notation and paleography
07 Bibliographies, music	58 Editing
08 Bibliographies, music literature	
09 Discographies and filmographies	Theory, Analysis, and Composition
10 Iconographies	60 General
11 Chronologies and almanacs	61 Rhythm, meter, tempo
12 Directories and membership lists	62 Tuning and temperament; scale, mode, melody
Collected Writings	63 Harmony and counterpoint (multi-part relationships)
14 Periodicals and yearbooks	64 Form
15 Festschriften	65 Orchestration, instrumentation, timbre
16 Congress reports, symposium proceedings	66 Style and structural analysis
17 Essays and documents	68 Techniques of composition
Universal Perspectives	Pedagogy
19 General (historical/ethnographical)	70 General
Historical Musicology (Western music)	71 Primary and secondary schools
20 The discipline	72 Colleges and universities
21 History, general	73 Conservatories and other professional training
22 To ca.500 (Antiquity)	74 Music education for amateurs
23 To ca.1400 (Middle Ages)	Music and Other Arts
24 To ca.1600 (Renaissance)	75 General
25 To ca.1750 (Baroque)	76 Dance
26 To ca.1825 (Classic and pre-Classic)	77 Dramatic arts (including film)
27 To ca.1910 (Romantic and post-Romantic)	78 Poetry and other literature
28 Twentieth century (history)	79 Visual arts (including iconography)
29 Twentieth century (musical life)	Music and Related Disciplines
Ethnomusicology (including history of music other than Western)	80 General
30 The discipline	81 Philosophy, aesthetics, criticism
31 General (more than one region)	82 Psychology and hearing
32 Africa	83 Physiology, therapy, medicine
33 Asia	84 Archeology, anthropology
34 Europe	85 Engineering and sound recording
35 North America (north of Mexico)	86 Physics, mathematics, acoustics, architecture
36 South and Central America	87 Sociology
37 Oceania, Australia, New Zealand	88 Linguistics, semiotics
39 Jazz, pop, and rock	89 Printing, engraving, publishing
Sound Sources	Music in Liturgy and Ritual
40 General (including conducting, organology)	90 General
41 Voice (including choral ensembles)	91 Jewish
42 Keyboard, organ	92 Byzantine (and other Eastern)
43 Keyboard, general	93 Catholic
44 String (chordophones)	94 Protestant
45 Wind (aerophones)	95 Buddhist
46 Percussion (membranophones, idiophones)	96 Hindu
47 Mechanical	97 Islamic
48 Electrophones (synthesized sound)	99 Other

表 1 b RILM 形態 (DOCUMENT TYPE) 分類

Article

- ac in a collection of essays
- ad in a dictionary
- ae in a memorial collection of essays (e. g., Festschrift or Gedenkschrift)
- ap in a periodical or yearbook
- as in a congress report or symposium proceedings

Book

- bc collection of essays, letters, or documents
- be memorial collection of essays (e. g., Festschrift or Gedenkschrift)
- bf facsimile or reprint edition
- bm book, monograph, pamphlet
- bp periodical as a whole
- bs symposium proceedings, congress report
- bt translation

Commentary

- cp program of a public performance
- cr recording accompanied by written material
- cs commentary on an edition of music printed separately
- cw commentary on an edition of music printed as an introduction or preface

Dissertation

- dd doctoral
- dm nondoctoral

Review

- ra of an article
- rb of a book
- rc of a collection of essays
- re of essays printed as memorial volume
- rf of a facsimile or reprint edition
- rm of an edition of music
- ro of an opera or concert
- rp of a periodical (including that of a yearbook)
- rr of a recording or film
- rs of a symposium proceedings or congress report
- rt of a translated writing

本稿では、これらの分類項目にしたがって、集計を行った。対象とした文献は、「ETHNOMUSICOLOGY」の項目中の小項目である「JAZZ, POP AND ROCK」(項目番号39番)に掲載されている全文献、および、CUMULATIVE INDEXの「POPULAR MUSIC」の項目に記載されている、39番以外の分野の文献で、その総数は2434件であった。(重複して掲載されている文献は、1本としてカウントした)

これらの文献について、発表年・形態・分野・言語を中心に量的な分析を行い、さらに一部、音楽ジャンル別の集計結果をつけ加えて考察を試みた。

ただし、INDEXで表記されている年度は当該RILMの発行年であるため、そのままでは正確な発表動向が把握し得ない。そこで、要旨部分に明記されている文献発行年を集計項目としてつけ加え、これによって分析を行った。また、67年度版では、ポピュラー音楽関係は項目番号が35番になっているため、集計に際しては39番に統一した。

なお、以下に報告する結果・表において、集計件数が分析対象文献の総数より少なくなっている。これは、1966年に発表された文献が67年度版に収録されている、どのような言語によって書かれたのかが判断できないなどの理由から、集計対象から除外した文献があるためである。

4 結果と考察

a 分野別発表件数の推移

ポピュラー音楽に関連する領域としては、57分野がリストアップされ、その総数は2345件であった(表2)。

15年間における全分野を通しての発表件数は、1967年の段階で86件であったものが、1971年で172件、1976年で166件、1981年には170件となっている。つまり、1967年からの5年間で発表件数は倍増したものの、続く10年間では大きな変化がみられない。さらに、1年ごとに件数を見ると、1974・75年にひとつのピークがあることがわかる。

これらの結果が、どのような理由によるものであるかは不明であるが、少な

表2 分野別発表件数

	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	合計
1	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4
2	0	0	0	0	0	2	1	0	0	3	0	0	0	0	0	6
3	0	0	2	3	4	2	1	2	3	1	7	0	0	3	1	29
4	0	0	0	0	1	0	0	0	2	2	6	0	0	0	2	13
5	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
6	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	1	0	0	1	6
7	1	2	2	6	0	0	3	1	3	1	0	2	0	1	1	23
8	0	0	1	0	1	3	0	3	1	0	1	0	0	0	2	12
9	3	3	3	2	7	3	3	4	3	4	5	1	3	1	2	47
10	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	1	0	4
12	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3
14	0	0	0	0	0	1	0	0	1	4	0	0	0	1	1	8
15	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
16	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	3
17	0	1	0	1	0	2	3	0	1	0	1	1	1	2	0	13
20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
21	0	1	0	1	1	1	0	2	2	1	0	1	1	0	0	11
24	0	0	0	1	0	2	0	1	1	0	1	0	1	0	0	7
25	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
26	0	0	2	2	0	2	1	1	2	0	0	0	0	0	0	10
27	4	2	0	1	4	4	3	1	3	1	0	1	2	2	5	33
28	1	3	1	0	0	0	2	1	2	1	0	2	0	1	2	16
29	5	3	1	2	2	5	6	5	6	1	6	6	3	7	3	61
30	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
31	1	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	7
32	1	1	0	1	0	1	2	0	0	1	0	0	0	0	2	9
33	2	0	3	0	1	3	3	2	3	2	0	0	2	0	2	23
34	14	8	6	4	11	7	13	2	9	4	5	3	5	3	6	100

35	3	3	1	8	7	6	10	8	3	6	9	5	4	6	3	82
36	3	10	1	2	6	2	3	2	5	3	2	9	4	7	1	60
37	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	4	
39	37	48	81	103	116	119	112	145	124	111	127	99	105	93	123	1543
41	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3
44	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
46	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
48	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
55	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
60	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
65	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
66	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
68	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
70	1	1	0	0	0	0	1	3	1	1	2	0	0	2	3	15
71	1	0	1	0	0	1	0	5	1	4	2	1	4	4	4	28
72	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2
76	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
77	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
78	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
79	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
80	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
81	3	0	0	0	0	1	0	0	1	3	1	2	2	1	0	14
82	0	2	1	0	0	0	1	0	1	2	0	1	0	1	1	10
83	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	0	0	0	5
85	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3
87	4	4	8	5	8	13	6	8	14	6	1	4	7	5	4	97
90	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	5
93	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	86	94	118	147	172	188	181	202	198	166	182	145	146	150	170	2345

くとも、70年代がポピュラー音楽研究におけるひとつの確立期であるとみなしてよいと思われる。しかし、これは見方を変えるならば、研究動向の量的な停滞期とみなすこともできるわけであるが、いずれにせよ、この点については、80年代を通してのデータとの比較検討によらなければ、その意味づけをすることは困難である。

また、74・75年におけるピークについてであるが、75年に関しては、「MUSIC AND RELATED DISCIPLINES」の項目中の小項目である「87：社会学」での発表件数（14件）が影響していると解されるものの、74年には関連分野での発表件数に突出したものがなく、単純に「39：ジャズ・ポップ・ロック」項目での増加が、同年度全体の発表件数の増加の原因となっている。とはいえ、それぞれの項目が、どのような理由によって増加したのかは、今回のデータからは明らかにしえない。

全分野での発表件数に対し、狭義のポピュラー音楽研究として、RILMの分野分類項目「39：JAZZ, POP AND ROCK」に分類されているものは1543件となっている。

こちらも、発表件数を年代ごとに追ってみると、1967年の段階で37件であったものが、1971年には116件、1976年で111件、1981年で123件と、全分野での発表件数の推移と同様の傾向をしめしている。ただ、全分野でのそれが、67年度から5年後に倍増であったものが、39番の場合、3倍増となって以後81年度まで安定した発表件数になっている。

これは、ポピュラー音楽に、ロックというジャンルが新しくつけ加えられたことが一因であると解してよいだろう。同時に、70年代以降、音楽産業全体が巨大化したことにともない、ポピュラー音楽を対象とした書籍の出版活動も活発化されたことも要因であると考えられる。また、その際の書籍が対象としている音楽ジャンルは、主にロックであると思われる。今回は、書籍と音楽ジャンルとの対応は分析を行わなかったために、明言は避けねばならないが、要旨の内容から判断すると、そのような傾向があるように見受けられる。

その他の分野での発表件数については、年度ごとには大きな変化は見受けられなかった。なお、各分野での15年間の発表件数を比較すると、「ETHNOMU-

SICOLOGY AND NON-WESTERN ART MUSIC」の項目中の小項目である「ヨーロッパ」・「北米」・「中南米」の各項目に分類された文献が、それぞれ100・82・60件あり、「MUSIC AND RELATED DISCIPLINES」の項目中の小項目である「社会学」が97件、また、「教育学（項目番号70～72番の合計）」が45件あるのが注目される。

ポピュラー音楽においても、その社会・文化・時代的な背景についての考察を抜きにして研究を行うことは不可能であり、収録文献でのこのような分野的な広がりには、そのことの反映であるといつてよいだろう。

また、「教育学」の分野でも、1974年を境に一定量の発表件数がみられることは、この時期、旧来のクラシック音楽中心の音楽教育からの脱却の試みがなされ始めたことを意味するものと解される。ただし、その際のポピュラー音楽が、どのようなジャンルを中心として行われているのかは、上述の書籍とジャンルとの関係同様、今回の分析の対象外であるために考察は控えたい。

b 言語別発表件数の推移

言語別の発表件数については、「英語」によるものが1286件ともっとも多く、「ドイツ語（東西両ドイツを含む）」の628件を大きく引き離していることがわかる。なお、学術論文などで、掲載誌の発行国とは異なった言語で発表される例があるが、今回の分析においても、その判別が困難なことから、集計から除外した文献があることをお断りしておく（表3）。

ただ、いずれにしても、「東欧圏（チェコ語など）」・「中米（ポルトガル語）」・「スウェーデン」の各国語の動向に着目すべき点はあるものの、「英語」・「ドイツ語」以外の言語で、100件台に達したものはなかった。

これらのデータは、基本的には、各国でのポピュラー音楽研究の動向を反映するものであるといつてよいだろう。何より、いわゆるポピュラー音楽という概念自体が、英語圏の文化的・学問的背景から成立していることからいって、英語文献の件数については当然の結果であると思われる。

これに対し、ドイツや東欧圏、スウェーデンでの発表件数について説明することは困難だが、おそらく、これらの国では古くからジャズ受容の歴史があったことが、こうした研究動向へつなげたものと解される（注5）。

表3 言語別発表件数

	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	合計
ブルガリア	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
チェコスロバキア	5	3	6	0	3	3	3	7	2	4	1	3	1	1	1	43
デンマーク	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1	3	0	0	4	5	16
ドイツ	12	19	41	38	40	38	27	73	33	28	53	53	64	64	45	628
英語	50	45	46	85	95	111	121	91	126	108	99	65	72	65	107	1286
フィンランド	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
フランス	9	1	4	3	7	6	6	1	8	10	5	6	3	4	8	81
ギリシャ	0	0	1	0	2	2	0	1	1	1	2	0	1	0	0	11
ハンガリー	2	0	2	0	0	0	2	1	2	0	1	0	0	0	0	10
イタリア	0	2	0	5	0	1	0	0	4	1	6	5	0	2	1	27
日本	0	1	1	1	5	4	6	2	0	0	0	1	0	1	0	22
韓国	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
オランダ	1	1	0	0	1	2	0	0	0	0	1	1	1	0	0	8
ノルウェイ	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	3
ポーランド	1	1	2	4	0	2	0	1	2	0	1	1	0	0	0	15
ポルトガル	0	8	2	2	1	1	2	2	2	3	2	7	3	6	1	42
ルーマニア	0	2	0	2	4	6	1	6	4	0	1	0	1	0	0	27
ロシア	0	0	2	1	3	3	5	4	3	2	1	1	0	0	0	25
スペイン	2	2	3	0	2	1	1	2	1	2	0	2	0	0	0	18
スウェーデン	2	5	5	1	0	1	2	0	4	5	5	1	1	3	0	35
ヴェトナム	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	0	0	0	0	0	4
	85	91	117	143	165	182	176	191	196	166	181	146	147	151	168	2305

しかしながら、ここで注意しなければならないことは、英語以外の言語については、それぞれの国の RILM 国内委員会の機能が弱体であるために、発表の動向をつかみきれていない場合があることである。

わが国においても、1967年から RILM 国内版が発行されているが、たとえば、紀要掲載論文など収集に困難性があるものはおくとしても、音楽教育の学

会誌・専門誌の所収論文、さらには、音楽教育関係の修士・博士論文のうち、かなりの件数が未収録となっているようである（山本，op cite）。

山本の報告は、音楽教育についてのものであるが、大倉がポピュラー音楽に関して調査したところによっても、国内版の文献の選定基準と収録結果についても、同様の結果を得ることとなった（注6）。

近年、ワールドミュージックと称される音楽ジャンルが注目を浴びた。また、世界各地で、民族音楽とロックなどの西欧型ポピュラー音楽との融合による新しい形態のポピュラー音楽が、多数生まれてきている。こうした状況の中で、ポピュラー音楽研究の発展を目指そうとするとき、RILMにおける非英語圏の文献収集作業の強化および精緻化が欠かせないものとなろう。

c 形態別発表件数の推移

形態別では、「ARTICLES」が924件でもっとも多く、以下、「BOOKS」が820件、「REVIEWS」が498件、「DISSERTATIONS」が92件、「COMMENTARIES」が18件となっている（表4）。

各形態での小項目を見ると、「定期刊行物」における発表件数が860件でもっとも多く、「書籍」が558件、「書評」が388件、「再版など」が147件と続く。「定期刊行物」での文献数に対して、「書籍」の発行点数が多いように思われるが、他の学問領域における両者間の比率など、比較のためのデータが得られない以上、この結果についての考察は差し控えるべきであろう。

ただ、「書籍」と「書評」の発表件数を年度を追って見てみると、「書評」の件数が「書籍」の発行件数よりも多くなっている年のあることに注意しておきたい。これは、書評というものが、対象書籍の発行された年度より後に発表されるために生じた現象と解されるが、それ以外にも、対象となった書籍の収録もれの可能性もあるため、今後の研究においては、両者の対応関係を調査する必要があろう。

また、「博士・修士論文」の発表件数が81年に9本と過去最高をしめしていることにも、着目する必要がある。すでに述べたように、RILM側の事情により、80年代全体の文献についてはデータ化できない状態にあるが、次項で参考としてあげた、86年単年度のポピュラー音楽関連の「博士・修士論文」の発

表4 発表形態別発表件数

	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	合計
ac	0	2	1	1	2	14	1	1	9	2	8	3	0	0	2	46
ae	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ap	39	39	63	42	80	59	78	69	67	50	46	49	66	54	59	860
as	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	10	17
bc	1	6	4	6	2	6	4	2	4	4	6	5	5	5	1	61
be	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2
bf	2	1	3	10	4	8	14	11	29	13	18	4	10	8	12	147
bm	24	30	29	43	44	45	31	42	55	59	51	29	19	24	33	558
bp	1	0	0	0	1	1	0	0	0	3	3	0	0	2	1	12
bt	0	1	1	1	4	3	5	4	0	2	4	2	1	6	6	40
cr	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	4
cw	4	1	0	2	1	1	1	0	0	2	1	1	0	0	0	14
dd	1	3	1	2	3	5	7	8	8	6	8	8	6	5	9	80
dm	1	2	1	0	0	0	1	1	1	3	0	1	0	0	1	12
rb	9	6	14	32	27	34	29	58	18	17	20	34	28	31	31	388
rc	0	0	0	4	2	1	0	0	0	0	1	3	2	5	1	19
rd	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	2	0	1	7
rf	0	0	0	1	2	1	2	0	2	2	7	1	2	1	0	21
rm	1	0	0	0	0	2	1	1	0	1	0	0	1	1	1	9
rn	2	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5
rp	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	1	0	0	4
rr	0	2	1	1	0	7	5	0	2	0	4	4	4	5	1	36
rt	0	0	0	1	0	0	1	1	2	1	1	0	1	0	1	9
	86	94	119	148	172	189	181	202	199	166	181	147	148	150	170	2352

発表件数が10件であることを考えると、80年代がポピュラー音楽の学術的な研究において新たな段階に到達したことを予想させるからである。ただし、今回のデータにおいて、修士論文よりも博士論文の方が発表件数が多くなっている点

については、DAIなどを使用して再調査する必要がある。

d ポピュラー音楽項目における形態別発表件数の推移

前項では、全分野を通しての形態別発表件数をみてきた。そこで、本項では、焦点をしばり、RILM分野分類項目「39: JAZZ, POP AND ROCK」(以下、「ポピュラー項目」と略)における、「定期刊行物」・「書籍」・「博士・修士論文」の動向に注目してみたい。なお、本項では、「REVIEWS」と「COMMENTARIES」の各項目は一括して集計した。また、参考データとして、86年単年度の発表件数を表右端に付記した(表5)。

その結果、「ARTICLES」が544件ともっとも多く、以下、「BOOKS」が529件、「REVIEWS」が415件、「DISSERTATIONS」が50件、「COMMENTARIES」が4件となっていることがわかる。また、「定期刊行物」のみの発表件数は511件、「書籍」のみが349件となっている。

これは、「ARTICLES」や「BOOKS」の総発表件数中のそれぞれ40%前後が、「ポピュラー項目」以外の分野に関するものであることをしめしている。

一般に、どのような厳密な分類基準を設けたとしても、ある文献を特定のカテゴリーに分類することは不可能といってよい(実際、CUMULATIVE INDEX

表5 ポピュラー音楽の項目に分類された主要形態における論文・記事件数

	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	合計	86
定期刊行物	14	20	41	23	55	35	43	39	29	30	37	32	49	31	33	511	62
他の刊行物	0	1	0	0	2	11	0	0	4	0	1	3	0	2	9	33	8
書 籍	11	16	17	28	23	23	21	33	39	39	32	18	12	13	24	349	78
他の文献	3	5	7	13	7	10	11	14	30	14	22	5	10	11	18	180	21
博士論文	0	0	0	22	2	2	6	5	2	5	6	3	2	2	8	65	10
修士論文	1	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	5	0
講座・選集	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4	0
レビュー	6	5	15	35	27	38	31	53	20	21	29	38	32	34	31	415	41
合 計	37	48	81	122	116	119	112	145	124	111	127	99	105	93	123	1562	220

たて列の合計は、81年までの件数。

では、重複して記載される文献も多い)。よって、上記の比率には、多少の異動があることが想定されるものの、基本的には、方法論や学問領域の面でのポピュラー音楽研究の広がり、あらためて確認できるデータであるといえよう。

年度ごとの推移については、各形態で差はあるものの、全般に、70年代に入ってから発表件数が増加し、その後ほぼ一定の件数で推移すること、「定期刊行物」では70年代前半、「書籍」では70年代中盤にひとつのピークがあること、「博士・修士論文」も70年代中盤にピークがあるといった傾向が認められる。

a 項でも述べたように、70年代を通じて直線回帰的な増加パターンが得られないことや、70年代中盤に発表件数が突出する場合があることの原因は不明である。ただし、発表件数の突出については、それらの年代におけるポピュラー音楽におけるトピックを詳細に検討することによって、解決の糸口がつかめるのではないかと推測される。

e ポピュラー項目における定期刊行物所収文献発表件数とジャンルの推移
ポピュラー音楽研究では、音楽のジャンルごとに研究がなされることが多いため、ジャンルごとの研究動向に関する分析を欠かすことはできない。そこで、本項では、上項同様、「ポピュラー項目」に限定しつつ、ジャンル別の発表件数の推移をみることにしたい。なお、分析対象を「定期刊行物」に限定したのは、15年間という比較的短いタイムスパンの中での動向を知ろうとする場合、「書籍」よりも、ジャンルごとの研究動向の実勢が反映されやすいのではないかと考えたためである。

ジャンルの分類にあたっては、各項目中に記載されているタイトル・要旨内容から、適当と思われるジャンルに大倉が分類・集計していった。この場合、問題となるのは、タイトルや内容からジャンルが判断できないものや、特定のジャンルに分類することが不適切なケースのあることである（注7）。

そこで、以下のような基準を設け、対応することとした。

- 1) ジャンルを特定できない文献は、一括して「その他」に分類する。
- 2) ジャンル分類が不適切な文献は、該当文献数と内容の実態に即して、ポピュラー・ポップの2項目をたて、そのいずれかの項目に分類する。

ex. 「HIT SONG」などについての文献はポピュラーへ、全体的な考察ではあるが、ロックや現代的なポップカルチャーについての文献であることが想定される文献はポップへ分類する。

この基準は便宜的なものであり、また万全なものでもないが、今回のデータおよび研究の目的にはそうものと思われる。

その結果、「ジャズ」が222件でもっとも多く、「ロック」は、「R & R」や「ポップ」を含めても、122件であり、以下、「ポピュラー」の38件、「C & W」の35件と続くことがわかる（表6）。

「ジャズ」の場合、69年に突出があることと72年に一時的に発表件数が減少していることを除けば、70年代を通じて2けた台を維持している。これに対して、「ロック」では、「R & R」と「ポップ」をあわせても、「ジャズ」の半数の件数で推移し続けている。しかも、参考データである86年をみても、「ジャズ」は36件で過去最高をしめしているのに対し、「ロック」は上記2分野を含

表6 ポピュラー音楽の項目に分類された定期刊行物掲載の論文・記事件数

	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	合計	86
popular	1	2	1	2	5	5	5	7	3	2	1	1	0	2	1	38	1
pop	0	1	1	5	6	2	4	4	0	0	3	2	0	0	1	29	1
rock	4	2	5	3	7	7	6	1	6	5	4	6	12	3	7	78	2
r&r	0	0	1	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1	5	1
jazz	3	6	24	9	18	5	11	21	12	19	15	16	25	20	18	222	36
ragtime	0	1	0	0	1	0	2	0	1	1	3	0	0	1	1	11	2
blues	0	1	1	1	1	0	0	0	0	2	1	1	2	1	2	13	2
r&b	0	0	2	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	1	0	7	0
c&w	0	1	0	1	6	4	7	3	2	0	0	1	0	0	0	25	1
hillbilly	1	0	0	0	3	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0
folk	3	2	1	3	4	0	2	2	1	0	0	2	1	0	3	24	0
etc	2	3	2	1	5	6	5	5	4	3	6	3	5	5	6	61	16
合計	14	19	38	25	56	34	46	44	30	33	34	33	45	33	40	524	62

たて列の合計は、81年までの件数。

めても4件にとどまっている。もちろん、86年発表の文献は、収録作業の関係上、翌年以降の版に掲載される方が多いとはいえ、「ジャズ」も同じ条件にあることを考えれば、両者の差はひらく一方のように思われる。

本研究での主眼点のひとつは、時代の taste や流行の変化により、ポピュラー音楽研究での対象ジャンルが、ジャズからロックへ移行する過程を明らかにすることであったが、本項での結果をみる限り、移行の事実は見いだせない。

それでは、どうしてこのような結果が生じたのであろうか。その理由としては、まず、ジャズがロックより古い歴史を有し、同時にそれを研究対象とする体制が、アカデミズムおよびファンの間において、はやくから確立されていたことがあげられよう。また、これに関連し、ジャズには一定のレベルの内容を持った論文を掲載する専門雑誌があること、そのため RILM の編集委員会の目にとまりやすく採録されやすいことが考えられる。

しかしながら、そうした事情があるとはいえ、経験則的にも、ロック関係の文献がこれほどまでに少ないとは考えにくい。そこで、形態および分野を問わずに、CUMULATIVE INDEX の記述から、「ポピュラー」・「ポップ」・「ロック」・「R & R」に分類される文献をカウントしなおしてみた。

その結果、「ロック」のみに限定しても、67～71年の5年間で17件、以下、5年ごとの集計で、54件、89件と推移し、86年単年度でも33件の発表があることがわかった（表7）。

表7 CUMULATIVE INDEX における、ロック・ポピュラー関連文献の発表件数

	67～71	72～76	77～81	合計	86
popular	6	2	5	13	2
pop	16	11	1	18	1
rock	17	54	89	160	33
r&r	1	0	0	1	0
合計	30	67	95	192	36

たて列の合計は、81年までの件数。

表7に明らかなように、4ジャンルを合計しても「ジャズ」での発表件数を越えることはないが、それでも、15年間を通して、順調な発表件数の伸びのあることが確認できる。これは、ポピュラー音楽研究において、ロックが研究対象として認知され始めたことを示唆するものと思われる。

もちろん、形態・分野を問わない集計であるということは、ディスコグラフィや事典中の記述なども含まれることを意味するが、そうした著作活動がなされること自体、ロック研究が活性化しつつあるものと解してよいだろう。

ただし、今回のデータからは、「ロックの定着により、ポピュラー音楽研究の対象がジャズからロックへ移行する」という、当初の仮説は実証されなかった。それどころか、「ジャズ」自体、77年からの5年間で発表件数を伸ばしているのが実際である。これは、ジャズが社会的に機能する「音楽ジャンル」であると同時に、いうならば「研究ジャンル」として確立されたものであることをしめすものと考えられる。

ところで、ジャズとロック・ポピュラー系音楽における、このような増加傾向は、70年代において安定期にはいるという、ポピュラー音楽研究全体での発表件数の推移と異なる部分がある。これは、フォークなどジャズやロック以外の音楽での発表件数が減少したために、全体的な発表件数の伸び率が失われたためと解される。その意味では、時代の流行の変化による研究対象の変化という問題は、ジャズ以外のジャンルにおいて考察されるべきであろう。

なお、ロック・ポピュラー系音楽での、「定期刊行物」における論考の少なさの問題は依然として残されているが、この点については、1980年代のデータがそろった段階で再考したい。

f ポピュラー音楽項目における博士・修士論文の発表件数と対象ジャンルの推移

RILMに収録されている文献は、狭義の学術的な著作だけではない。ことにポピュラー音楽の場合、どのようなものを学術的とするかの基準がないこと、学術的なアプローチをしていないものにも大きな価値があるものも多いことから、収録文献を限定することは、研究者にとって、かえって不利益を生じさせることになるだろう。

とはいえ、本論考の目的にかんがみるとき、いわゆる学術的な研究の動向を把握しておく必要がある。しかしながら、RILMにおける記載部分からは、それが学術誌・学術研究書であるのか否かを判別しきれない場合も多い。そこで、本項では、ポピュラー項目に分類されている「博士・修士論文」における研究動向を、ジャンルとの関係で見てゆくこととする。

その結果、15年間での発表件数は50件であり、これは、全分野を通しての「博士・修士論文」の発表件数（94件）の53%にあたるのがわかる。ジャンル別では、「ジャズ」が26件でもっとも多く、「ロック」が9件で続く以外は、その他のジャンルでの発表件数は4件以下に留まっている。また、86年単年度では、「ジャズ」が5件、「ロック」が2件、その他2件であった（表8）。

なお、表8中では明記していないが、「博士論文」は45件、「修士論文」は5件であった。しかし、c項で指摘したようにRILMにおける修士論文の収録件数には不明な点もあるため、本項では一括して集計した。

表8に明らかなように、ここでも、「ジャズ」の発表件数が他のジャンルでの件数を、大きく引き離している。これは、前項で考察したように、ジャズが研究の対象とするに足る音楽であるという認識が定着していること、その過程で、先行研究が蓄積されていることや分析の手法が確立していることなどが、要因となっているものと解される。

さらに、本項では、それぞれの論文が、どのようなスタイルで執筆されているかについても分析を試みた。まず、便宜的に、「総合」（理論的考察を主体）、「分析」（様式・演奏技術を主体）、「調査」の3種類の項目をたて、タイトル・要旨内容を手がかりとして、各文献を分類した。

その結果、「総合的」が22件、「分析的」が26件、「調査」が2件であった。なお、86年単年度では、「総合」が6件、「分析」が2件、「調査」が1件となっていた。

博士・修士論文は、サンプル数が少なく、何より要旨内容からの判断であるために、全体的な傾向についての考察は控えたい。ただ、ジャズに関しては、「総合」が10件であるのに対し「分析」が16件と、「分析的」な論考が多い傾向にあることは指摘できよう。これは、上述の、ジャズにおける分析手法の確立

表 8 ポピュラー項目に分類された博士・修士論文の方法論別発表件数と対象ジャンル

	67	68	69	70	71	72	73	74	75
	G A S	G A S	G A S	G A S	G A S	G A S	G A S	G A S	G A S
popular							1		
pop							1		
rock			1 1				1	1	1
r&r						1		1	
jazz		1		1	1		1 2	1 3	1
regtlme									
blue					1				
r&b								1	
その他	1					1			
小 計	1	1	1 1	1 1	2	2	2 4	1 6	2
合 計	1	1	1	2	2	2	6	7	2

	76	77	78	79	80	81	合 計	86
	G A S	G A S	G A S	G A S	G A S	G A S		G A S
popular							1	
pop		1 1					2	
rock	1			1	1	1	9	1 1
r&r							2	
jazz	1 3	1	1 1	1	1	4 1 1	26	5
regtlme		1				1	2	
blue		1					2	
r&b	1						2	
その他		1	1(?)				4	1 1
小 計	2 4	1 5	2 1	2	2	6 1 1	50	6 2 1
合 計	6	6	3	2	2	8	50	9

年度の下のは方法論 G=GENERAL、A=ANALYTICAL、S=SURVEY

たて列の合計は、81年までの件数。

その他には、シャンソン・ダンスなど

などの要因によるものと解される。

だが、これは言い換えるならば、ジャズを対象とした学位論文作成が一般化されるまでには、デキシードジャズから数えても、50年という年月が必要であることをしめすものである。今日、ポピュラー音楽研究のための環境は整備されてきたとはいえ、ロックおよびロック以降の音楽表現に関し、それを理解・享受するための理論と方法の完成には、まだ多大の時間と学問的な努力が必要なことを、今回のデータは指ししめしているように思われる。

5 まとめと考察

ポピュラー音楽研究の動向を明らかにするために、RILM abstract を使用し、1967～81年度に発表された文献2434件を対象に、発表年度・言語・分野・形態・ジャンルについて内容分析を行ったところ、以下のような結果を得た。

a ポピュラー音楽に関する文献件数は、1970年代にはいり増加した。しかし、一時的な件数増加のピークがあるものの、全体的には、直線回帰的な増加傾向を認めることはできなかった。

分野については、57分野において発表がなされ、そのうち、RILM の分野分類項目「39：ジャズ・ポピュラー・ロック」（以下、ポピュラー項目）に記載された文献は1543件であった。

b 使用言語については、1286件が英語であった。これに、ドイツ語が628件で続くが、それ以外の言語は、すべて2けた台であった。

c 全文献における形態別発表件数では、ARTICLES が924件でもっとも多く、以下、BOOKS が820件、REVIEWS が498件、DISSERTATIONS が92件、COMMENTARIES が18件で続いた。

d ポピュラー項目に分類された文献に限定した形態別発表件数では、ARTICLES が544件ともっとも多く、以下、BOOKS が529件、REVIEWS が415件、DISSERTATIONS が50件、COMMENTARIES が4件であった。

e ポピュラー項目に分類された文献のうち、定期刊行物に発表された文献では、ジャズが222件でもっとも多く、ロックは、R & R・ポップ・ポピ

ュラーを含めても、150件であった。なお、その他のジャンルで、発表件数が3けた台に到達したものはなかった。

- f ポピュラー項目に分類された文献のうち、修士・博士論文は50件であった。ジャンルでは、ジャズが26件でもっとも多く、他のジャンルは、ロックの9件を最高に、すべて1けた台であった。

本論考では、1967年から1981年までのポピュラー音楽研究の全体的な動向を把握すること、および、その過程において、ポピュラー音楽研究の増加傾向と研究対象ジャンルの、ジャズからロックへの移行の様態を確認することを主眼としていた。

しかしながら、上記の結果から明らかなように、文献発表数は70年代に増加したものの、直線回帰的な伸びをしめさず、また、研究対象ジャンルは、依然としてジャズ中心に行われていることが確認された。

今回の分析から、いくつかの知見を得ることができたが、残された問題も多い。しかし、紙幅の関係もあり、ここでは、RILM を使用しての継続研究において、優先されるべき課題を3点だけあげておきたい。

第1に、今回間に合わなかった、1982~86年までのデータを完成させることである。本研究において、ポピュラー音楽研究が、80年代に新たな展開を見せることを予測させるデータが散見されている。よって、そのような展開の有無について確認することから始めるべきであろう。

第2に、所収文献のテーマ別分類を行うことである。これは、CUMULATIVE INDEX においてすでに実施されてはいる。しかし、その基準は便宜的なものであり、研究動向や当該文献の方法論を把握するには適切性を欠く部分があるために、その際には、新しい分類基準を設ける必要がある。

第3に、RILM において不明確な点を、他の資料を使用して、正確なデータとすることである。たとえば、学位論文の発表件数などについては、容易に解決がつくものと思われる。

本文中でも指摘したように、RILM は必ずしも完全な資料ではない。しかし、音楽全般について、これだけの質・量をそなえた資料が、他に存在しないこともまた事実である。本稿は、いわばポピュラー音楽の研究についての研究

であるが、そのような作業を行うにあたって、RILMの有効性を否定することは困難である。

この点を再度確認しつつ、上記3点の課題に取り組んでゆきたい。なお、その過程において、今回の分析で不明となっている点を明らかにし、次の機会であわせて報告をおこなう予定である。

付記

今回の分析結果の一部は、日本ポピュラー音楽学会第5回大会（1993年）で発表されたことをつけ加えておく。

本論考作成にあたって、実践女子短期大学の伊藤佐代子さんのご協力を得た。また、神澤志摩（成城大学）、岩元佐知子・水瀬雅代（実践女子短期大学）の諸嬢にもお手伝いいただいた。ここに、お礼申しあげます。

最後に、これまでのご指導・励ましに対する感謝のしるしとして、成城大学の岡本奎六教授に、本論考を捧げます。

注

注1 もちろん、何をもって研究体制の整備とするかについて、厳密な基準があるわけではないが、専門学会の成立をひとつの指標とするならば、それは1981年ということになる。この年、国際ポピュラー音楽研究会議が開催され、その席上、国際ポピュラー音楽学会の設立が提議され、同年、学会が設立されている。（設立の経緯については、三井、1990）

われわれが、レコードやラジオを通じて音楽を享受するようになってから、あるいは、いわゆるポピュラーカルチャー研究が隆盛をきわめてから、かなりの時間がたってからの専門学会の設立は、必然的に、この領域での研究におけるパースペクティヴや方法論を確立する上での立ち後れの一因となっていると見てよいであろう。

注2 ディスコグラフィとは、ある演奏家やグループなどが録音したレコードすべてにおける、収録曲・参加演奏者・録音年月日・録音者などを記した詳細な記録・リストのことである。

ポピュラー音楽，ことにジャズの場合，ディスコグラフィの作成は厳密を極め，その過程であらたな発見が数多くなされている。

注3 分析対象として，たとえば，国際ポピュラー音楽学会の学会誌を使用することも一案であるが，その場合，雑誌の編集方針の影響を受ける可能性がある。ことに，本稿での目的からすれば，abstractを使用する方が信頼性の高いデータが得られるものと思われる。

また，注4に記した事情を勘案するとき，1981年創刊の同誌を使用することは，ロック全盛期における研究動向を把握には不適であると思われる。

注4 ビートルズがビルボード誌において全米第1位を獲得するのが1964年であり，この年をいわゆるロック時代の幕開けとするならば，ロックに表現上の限界があらわれ，NEW WAVE・PUNKの出現で，それまでのロックの音楽的な表現様式が変化し始めたのが1970年代後半である。

注5 たとえば，ドイツは，長い歴史と成果を誇るベルリン・ジャズフェスティバルの開催国であり，また，前衛ジャズへの深い理解をしめす国としても知られている。

注6 この20年間におけるRILM日本版において，ポピュラー音楽の項目「39：ジャズ・ポップ・ロック」に分類・収集された文献数は，以下の通り。

年度	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82
件数	2	0	3	3	18	4	5	3	1	7
年度	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92
件数	11	9	5	6	7	11	3	13	7	7

総数は，20年間で108件であり，その内，日本人の著者によるものは58件（別に，アメリカ人が日本語で書いたものが1件）で，それ以外は，翻訳書であった。その他，社会学など別の項目に分類されたものが14件あった。

この選定に対する疑問の一例として，1978年から7年間にわたり，小泉文夫のコーディネートで実施された流行歌に関するシンポジウムの記録7

冊の、また、1989年の稲増龍夫の「アイドル工学」の欠落があげられよう。

しかも、本稿での分析の対象期間（81年度まで）との対応関係を見ると、国際版（10件）と国内版（34件）との間で、発表件数に相違があることがわかる。つまり、国内版作成時での選定基準に加え、国際委員会への報告のしかたにも不明な部分があるように思われる。

注7 RILMでは、ポピュラー音楽は、ETHNOMUSICOLOGYの中の小項目に分類されている。これは、おそらくは、ある時代までポピュラー音楽のひとつの典型であったジャズやフォークの成立過程にのっとった結果であると解される。また、ポピュラー音楽の項目も、初期には「CURRENT JAZZ, POP, AND ROCK」と表記され、最近の「JAZZ, POP, AND ROCK」と微妙な差を見いだすことができる。

REFERENCE

- Frith, S 「サウンドの力」 細川周平・竹田賢一 晶文社 1990
- Frith, S and Goodwin, "ON RECORD", Routledge, 1990
- International Association for the Study of Popular Music(IASPM) THE SIXTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON POPULAR MUSIC STUDIES' PROGRAM, IASPM, 1991
- 石川弘義 他 「大衆文化事典」『ポピュラー音楽』 中村とうよう 弘文堂 1991
- 北川純子 「ポピュラー音楽の社会学的研究における諸問題」 音楽学 26/1 日本音楽学会 1980
- Lull, J(ed) "POPULAR MUSIC AND COMMUNICATION", Sage, 1987
- Middleton, C "STUDYING POPULAR MUSIC", Open University Press, 1990
- Negus, K "PRODUCING POP", Edward Arnold, 1992
- 三井徹 編訳 「ポピュラー音楽の研究」 音楽之友社 1990
- 宮司正男 「現代社会心理学研究に関する覚え書」 コミュニケーション紀要 No. 7 成城大学 1993
- 山本文茂 「音楽教育研究の方法と分野」 音楽之友社 1992